



黒手袋



bloodmaria

ワタシには靈感というものがありません。宗教レベルの神仏、敬愛されるべき人類の指導者的大人物とやらも信じてはいませんし縋る気もありません。テレビのミニコーナーでやっている星座や血液型を扱った占いにすら興味のない人間です。

あくまで、これは人づての昔話に過ぎず、かつ幽霊のような類も出てはきません。しかし、これから記すお話は紛れもなく怪談に分類されるものでしょう。

思い起こすたびにワタシのような"カタブツ"が、新たな不安と焦燥を胸に刻みつけられる不吉な妄想なのです。

ワタシの友人に大学の教授がいます。彼は2012年の夏までアメリカの学校で日本語を教えていました。同学校には教師仲間のKという人物がいたそうです。

Kはアイルランド出身で日本の文化、特に建築へ興味を持っていました。ですから日本人である彼とはすぐに友人と呼べる間柄になったのです。

Kは物理学に精通しており、ジョークを利かせた独特の授業も生徒たちに人気がありました。そんなKはプライベートで、学校の授業にまったく関係のない奇妙な実験を行っていました。『ラプラスの魔物になれる方法だ。世界へ脆い点を造り出すのさ。誰も知らない裏技をやってやる』

ある日、休日の過ごし方を尋ねた彼に対してKは不敵に笑ってそう返しました。このときはまだ何かの比喩なのだろうと彼は思っていたそうです。

後に彼が見たKの研究日誌には、実際にその手順が事細かに記されていました。その実験で重要な役割を果たすのが黒い手袋です。

これは正真正銘ただの革手袋でした。実験とは、この手袋の内部に時間を超越した重複する世界を造り出して、そこから得た情報をKが認識するというものだったのです。

催眠暗示を用いて自分の記憶を欠落させたり、再生させたり、山荘の屋外プールを改造した"ゼロ観客の人魚檻"という特殊な部屋を実験場に選んだり、Kの行動は常軌を逸したものでした。

過去の自分へ伝えたいこと。

未来の自分が教えてくれるはずのこと。

それらは指の動きのみを使った簡易手話で送受信されていました。これによって、いくつもの過去や未来が誕生するそうです。

『どれだけ感嘆したことか、誰にも想像できないだろう。初めて手袋の中で別の自身の指に触れたときの混沌は計り知れないものだった。まあ、日誌を書き終えたら忘却しなければならないわけだが。正確に云うと感嘆した今日の自分を殺して、次の自分が次の結果を手に入れるのだ。さようなら、今日の自分。なかなかの人生だった』

常軌を逸すれば、破滅以外に何も得られないのが世界の理のはずです。でもKは常軌を逸して、おそらく結果を得てしまいました。ここまでの内容が全てKの妄想だったとしても、現実起きた結果は多くの人が知っています。

どんなことでも賭博にしてしまうサイトが外国にあります。そこではスポーツの試合だけに留まらず、天気予報まで賭博のネタにされていました。Kの神懸かり的な当選は運営者を困惑させて、他ギャンブラーからは信者的な層を獲得していたのです。天気予報の賭博に至ってはテレビなどでも紹介され、科学者たちからも注目されていました。

のらりくらりとKは答えをはぐらかして、いましばらくは私腹を肥やそうと決めていたそうです。

もう一度、書き記しましょう。

常軌を逸すれば、破滅以外に何も得られないのが世界の理のほうです。

世界はKを見逃しませんでした。

『何が起きているのか、皆目見当もつかない。送受信の際に"邪魔"が入るようになった。怖い。阻害されている。怖いのは、阻害しているものが意思のようなものを持っている気がする点だ。指が触れ合おうとすると肉質の壁に押さえられる。さっきは、とうとう指を掴まれたようだった。掴まれた際、未知の気配が意識を急激に押し広げた。スケールに圧倒されて自分がなくなりそうで泣き叫んだ。子どもの頃、海にそそり立つ巨大な断崖絶壁を見上げて得た感覚に似ている。完全無欠な非対等。恐ろしい。感じ取ったのは、ほんの片鱗だとわかる。それが自分を認識したと思うだけで頭が狂いそうだ。認識されてしまった。それはきっと自分をよく思っていない。目をつけられてしまった。こんなことするべきじゃなかった』

これが日誌の最終記録です。

Kは塞ぎ込むようになっていきました。実験の再開は目処が立たず、賭博サイトへも近づかなくなりました。

最後の実験以来、周囲の声や文字の特定部分が、まるで自分を問い詰めるように響き、鮮明に光り出したそうです。

それは概ね、次のような言葉でした。

<異物>

<イレギュラー><容量制限>

<予期されていたバグ><今回はずいぶん早い><予防接種の必要性><下方修正になりそうです>

<新しい段階へ><今季も厳しい><またゼロからやり直しか><世界の視聴回数一億以上>

<削除しますか？>

<今度のアップデートには期待してください>

<さようなら、今日の自分。なかなかの人生だった>

やつれ果てたKは、研究日誌を彼に渡して学校を去っていきました。Kの理論では自分自身で研究日誌を処分するのは御法度だったようです。Kは日本人の道徳心というものを買っていました。他の者では信用できず、彼に研究日誌の処分を依頼したのです。

『絶対に誰にも渡さないでくれ。損得の問題じゃない。まだ知っちゃいけないことなんだろう。あれ以来、ずっとだ。敵意を含んだ警戒を感じる。街に行く人たち、キミではなくキミの存在そのもの、あそこの木陰にいる鳥も、その木陰を造っている木も、駐車場の自動車も、空も芝生も

山も川も海も、世界そのものから。驚くべきことがあった。何日か前のことだが、大方あれは審判のようなものだった。無罪放免とはいかなかったが、情状酌量の余地は認められたらしい。日誌を処分したらキミも全部忘れてくれ。……………同じ日付の木曜日を迎えるのは、もう懲り懲りだ』

Kは心の病いにかかっていたのでしょう。そう結論を出しているはずなのに、やはりワタシはKの妄想におかしな危機感を抱いてしまうのです。

その一因は研究日誌を受け取った彼の行動にあります。

『Kが去った後にさ、外国の科学チームだか名乗る奴等が現れて食事に誘われたんだ。たかだか20ページくらいの胡散臭い研究日誌に10000ドルだぜ？ 提示されて即OKしたよ。ああ、でも失敗したかなって思うよ。もっとふっかけられたかもしれないからさ。暇人っていうか、科学者ってのは変人ばかりだよな。バカタレだね』

作者:裏組織で犯罪ワルカコイイ中二病末期の会